

SPARC Japan セミナー2024

「オープンアクセス義務化の先にあるもの: 来るべき世界に向けて」

オープンアクセス時代の情報リテラシー

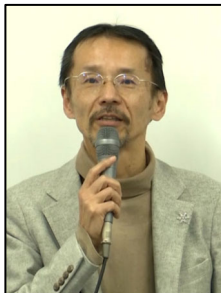
野末 俊比古

(青山学院大学)

講演要旨



論文・データなどの研究成果のオープンアクセス化は手段に過ぎず、研究者を含む利用者が活用することこそが目的である。論文・データなどの探索・活用などにあたって、利用者には情報リテラシー（ここではデータリテラシーを含む）が求められる。学術情報流通の在り方が変わっていくなかで、情報リテラシーはどのように変わってきたのか、また、変わっていくのか、整理してみたい。また、今後、情報リテラシーをどのように修得・向上していくのか、大学図書館の役割も含めて、検討してみたい。



野末 俊比古

青山学院大学教育人間科学部教授・学部長、同大学革新技術と社会共創研究所副所長。学術情報センター助手、文部省社会教育官、青山学院大学文学部准教授、国立情報学研究所客員准教授などを経て、現職。日本図書館協会図書館利用教育委員会委員長、国立国会図書館科学技術情報整備審議会基本方針検討部会長、東京都立図書館協議会議長なども務める。専門分野は図書館情報学、教育情報学など、関心領域は情報リテラシー教育、教材（学習資源）開発など。

私がいただいたお題はリテラシーです。私の話は、即時オープンアクセス（OA）の義務化そのものより、セミナーの趣旨にあるとおり、オープン化された研究成果・知的資産に広くアクセスできる未来は、どんな社会か、どんな世界か、研究者だけでなく市民がその知的資産をどのように利用できるか、というところに焦点を当てたいと思います。この後のディスカッションのたたき台として、やや大きな方向性、大枠について私見を含めてお話しします。また、勤務先にある研究所のプロジェクトの成果についてもお話しします。私の専門は広い意味での教育学ですので、その点を踏まえてお聞きいただければと思います。

OA 時代の（学術）情報利用

リテラシーについて考える前提として、オープン化が

さらに進むと情報利用はどのようなになるのか、簡単に整理いたします（図1）。利用者からすると、利用できる情報の量、質、種類が増えていきます。大学の新生入生でも、高校生でも、市民であっても、これまで使わなかった、あるいは使えなかったリソースが使えるようになることを意味します。狭義の学術や研究だけでなく、幅広い用途で研究成果が使われるようになります。

オープンアクセス時代の（学術）情報利用

	これまで	これから
流通	研究成果（論文など） 専門家による質保証（査読など）	研究の素材（データなど） 利用者による“質”評価
管理	メディア（形態）に基づく 資料（群）/コレクション アナログの延長・対比 検索（データベースなど）	コンテンツ（内容）に基づく 情報（源）/リソース “デジタルネイティブ化” 探索（AI 利用などをきむ）
利用	（狭義の）研究者 （狭義の）研究のため 伝統的な教育（受け手）	さまざまな利用者（市民） 幅広い（新たな）用途 主体的・探究的・協働的な学び（作り手）

(図1)

当然、そこに伴うリテラシーも変わることになります。特にデータの流通の部分は大変大きな問題になると思います。データの取り扱いが分野や利用目的によって大きく異なり、そもそもどういうデータをどのように収集・整理するかということも、分野によって大きな違いがあります。つまり、専門性が高まり、リテラシーの言葉で言うと、文脈の依存性が高くなっていくということになります。

情報リテラシー観の展開・転換

このように考えると、われわれは今、リテラシーの捉え方を変えていく時期にあるのではないかと思います。汎用的な基盤があってそれを応用していくのではなく、さまざまな文脈のなかでリテラシーを捉えていく、つまり、分野や領域、あるいは利用の目的といった広い意味での文脈に基づいてリテラシーを捉え直していくということです。今までは、手段であるはずのリテラシーを、習得することが目的化しているところがあったと感じています。これからは、手段であることをより明確にしていくことになると思います(図2)。

利用者とシステムとのギャップをどう埋めるか (情報リテラシーをめぐる三つのアプローチ)

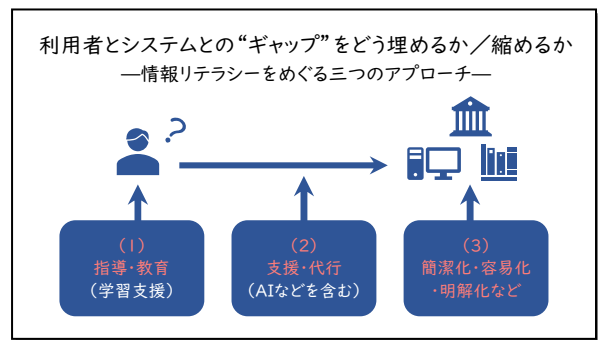
リテラシーは手段ですから、平たく言うと、学ばなくて済むのであれば学ばなくてもいい。研究であれ、その他の知的な活動であれ、情報利用の目的が果たせれば学ばなくてもいいのではないかなと言えます。

リテラシーが問題になるのは、利用者の持つリテラシーと、広い意味でのシステム(図書館、データベース、パソコン、アプリ等)を使うときに求められるリテラシーとの間にギャップがあるときです(図3)。

そのような場合、利用者に「利用の仕方を理解してください。少し難しいので覚えてください」などと指導・教育するだけでなく、「一緒に情報を探しましょう」「代わりに探しましょう」と支援・代行するアプローチもあります。また、そもそも使うのが難しい仕組みやシステムを、より簡単に、容易に使えるようにすることにも、もっと注力していくべきだと考えます。本日は大学図書館の視聴者が多いようですので、大学図書館を想定して、一つずつ見ていこうと思います。

図書館サービスとしての情報リテラシー教育

一つ目は、情報リテラシー教育です(図4)。文脈に紐付いていくということは、大学ではカリキュラムに基づくことが優先されるようになります。当然、図書館だけで完結するものではないため、専門的領域に詳しい方々との協働も必要となります。また、これからはテクノロジーの活用が前提となるため、図書館に集合して一斉に教えるだけでなく、ウェブ教材などさ

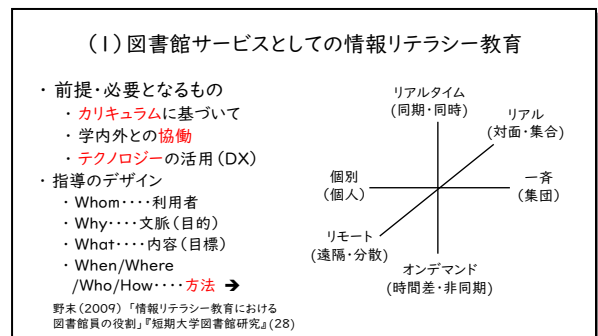


(図3)

情報リテラシー観の展開・転換	
これまで	これから
汎用性(とその応用) 社会(コミュニティ)における生活(機能)に必要な情報の“読み書き(活用)能力”	包括的な把握と“文脈”に応じた構成 分野・領域など利用の目的や利用者の意思など
伝統的な学力(能力)観 技能が中心	新しい学力(能力)観 技能(カラダ)+思考(アタマ)+情意(ココロ)
図書館・授業などごとの対応 プログラム型の教授学習法	カリキュラムに基づく/協働的な対応 プロジェクト型の教授学習法
習得・向上すべき(目的化) 図書館などが教育・指導できる/すべき	状況などに応じて(手段として) 教育・指導以外のアプローチも

野末(2014)「情報リテラシー教育の『これまで』と『これから』」『情報の科学と技術』61(1)

(図2)



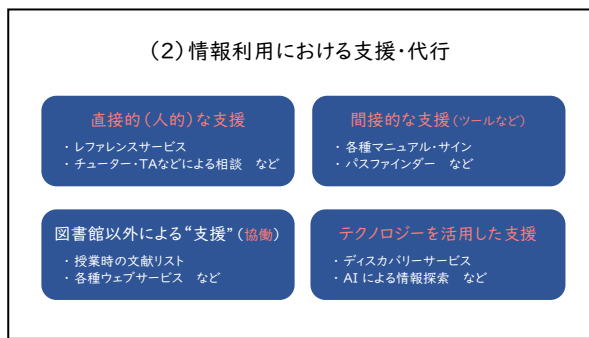
(図4)

さまざまな方法を工夫していくことになります。

情報利用における支援・代行

二つ目は、支援・代行です（図 5）。リテラシーにギャップがあるときには、レファレンスサービスを典型とする直接的（人的）な支援のほか、各種マニュアルやサインなどのツールを使った間接的な支援が今でも行われています。これに加えて、これからは図書館以外による協働的な支援、そしてテクノロジーを活用した支援が広がっていくと思います。

一例として、AI を活用した蔵書探索システムをご紹介します（図 6）。これは私がプロジェクトリーダーを務める研究プロジェクトで、富士通 Japan 株式会社との共同研究で開発したものです。2024 年 1 月以降、公共図書館に順次、導入されて稼働しています。ウェブサイトから誰でも使えますので、ご関心があればぜひお使いいただいて、感想をお寄せいただければと思います。公共図書館の蔵書を対象としたものとしては、調べた限りでは日本初のものです。私としては、あくまでも研究として、無償で（笑）取り組んでいます。



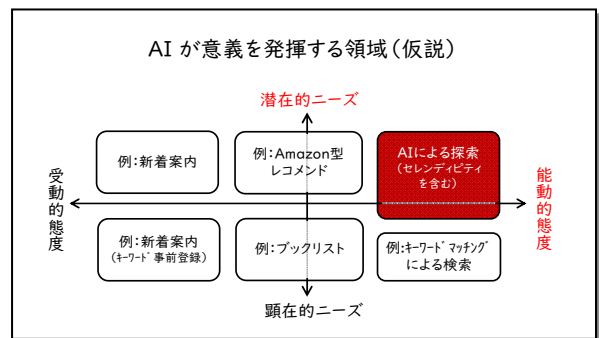
(図 5)

ただ、AI は万能ではありませんので、さまざまな情報やデータを探すときに、AI で全てがかなうわけではありません。図 7 で示しているとおり、能動的態度で何かを探している、かつ何を探しているのかが必ずしも明確でない、つまりニーズが潜在的である、という右上の赤色の部分が、AI が最も意義を発揮する領域と考えています。今までレファレンスサービス等で人的にカバーされてきたところですが、これからは AI 等の力も借りて、分担していくようになるでしょう。

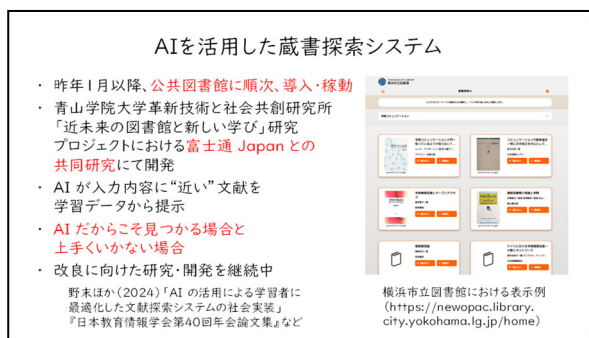
そうなると、リテラシーの在り方も変わっていくと思います。例えば、先ほどの AI による文献探索は、条件に当てはまるものをピックアップするという「検索」の考え方ではなく、近そうなものから全てを順番に並べるという「探索」という、これまでとは全く違う考え方で行われています。そのようなことも、これからは理解していく必要があります。

利用者志向の情報利用環境

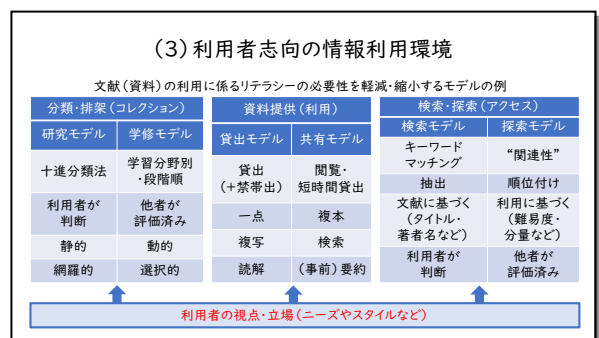
三つ目は、使いにくいものを使いやすくすることに注力するべきだという考え方です（図 8）。つまり、



(図 7)



(図 6)



(図 8)

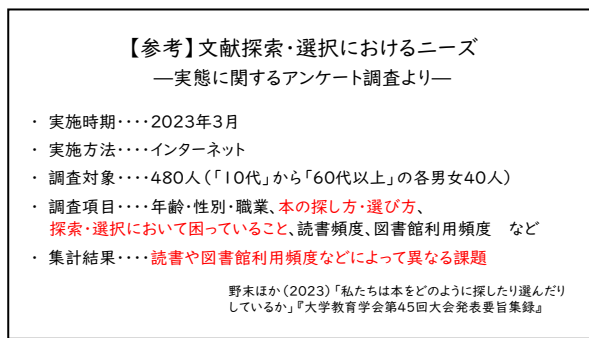
図書館に限らず、データベース等をリテラシーがなくでも使えるものにしていくということです。ただ、何が使いやすいかは、利用者の立場や視点からでなければ判断できません。したがって、利用者のニーズや利用のスタイルをきちんと分析していくことが求められていくと思います。

一例を示すと、先ほどのプロジェクトにおいて、本を探したり選んだりするときに困っていることについてアンケートを採ったところ（図 9）、どのような困りごとを抱えているかは、読書や図書館利用の頻度、つまり普段から文献にどの程度親しんでいるかによって異なることがわかりました（図 10）。普段から文献に親しんでいる人の困りごとは、「キーワードが思いつかない」「ジャンルがわからない」など、今までリテラシー教育でも語られてきたことでした。一方で、普段から文献に親しんでいない人の困りごとは、「自分に合った難易度の本がわからない」「自分に合った分量がわからない」などというものでした。これに対しては、リテラシーを教育するのではなく、文献の難易度や分量がわかりやすい仕組みをつくっていくとい

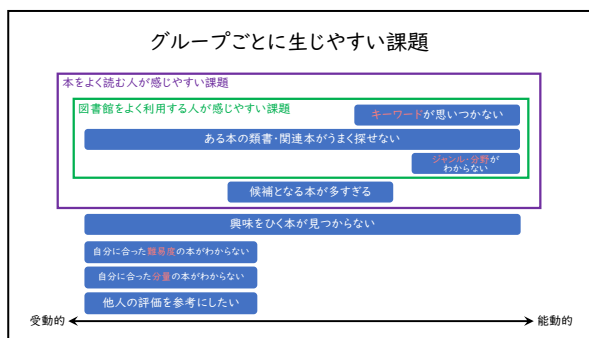
ったことが重要だと思います。これからオープン化が進んでいくなかでも、このようなニーズ調査はぜひ進めていく必要があると考えています。

まとめにかえて

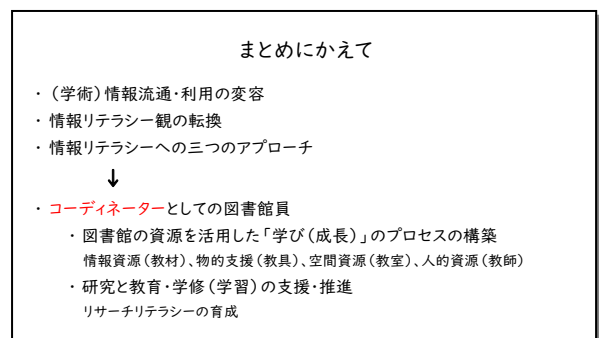
以上、オープン化の進む今後において、情報リテラシーについてどのようなことを考えていくべきかに関して私論・私見を述べてきました。一言で言うと、図書館の役割も変わっていくと思います。私はそれを「コーディネーターとしての図書館員」と呼んでいます。触れられなかった論点も多々ありますが、この後のディスカッションで補いたいと思います（図 11）。



（図 9）



（図 10）



（図 11）